



雷も天狗もまじる百人首
菅原道真
崇徳上皇
讃岐の足跡



崇徳天皇は平安末期の第七十五代天皇。名は顕仁。祖父にあたる白河天皇の子という出生の暗い秘密から保元の乱に敗れ、讃岐配流となる。この事件は、やがて武家社会の抬頭を見ることになり、「願わくば大魔王となりて天下を悩ません」と言った上皇の怨念の深さによる夕タリの風評が立つ。

和歌に堪能な上皇は讃岐生活の中で、「濱千鳥 あとは都にかよへども身は松山に音のみぞなく」など都恋しの思いを数多く詠む。髪は剃らず、髭はあたらす、爪は切らず、目を血走らせ、まるで天狗の形相での崩御の後、白峯陵（しらみねのみささぎ）に葬られる。高松藩の崇敬に守られていた上皇の御霊は、明治改元の直前に都へ帰る。



菅原道真は平安時代前期の学者（文章博士）であり、右大臣にまで昇進した政治家でもあった。讃岐とのかかわりは、仁和二年（八八六）より四年間、国司としての滞在による。讒言（中傷）によって九州太宰権帥に左遷され、都を去る時に詠んだ「東風吹かば匂いおこせよ梅の花 主なしとて春な忘れそ」の和歌にちなんだ飛び梅伝説は有名。絶望のまま世を去った後、都におきる天変地異や清涼殿の落雷事件は道真の夕タリがなせる業との怨霊伝説流布から、北野天満宮、太宰府天満宮などで天神信仰が始まる。江戸時代には学問の神様として隆盛を極め、今日には受験の神様として崇敬を集めている。



四国新聞連載「客たち」三部作完成記念
（財）中條文化振興財団助成金交付事業

発行： 客 の 会

〒761-8052高松市松並町587-3

TEL087-865-8251

妹尾共子

「雷も天狗もまじる百人首」とは小倉百人一首の作者の中に、雷（菅原道真）や天狗（崇徳上皇）などの異色がまじると揶揄した古川柳。

ちなみに、雷さまと天狗さまの和歌。

このたびは幣もとりあへず 手向山
もみぢの錦 神のまにまに 菅 家

瀬をはやみ 岩にせかるる滝川の
われても末に 逢わむとぞ思ふ 崇徳院